

ムーンメモリア・ロストノイズ
一話・邂逅

雨和七瀬

王宮を朝早くに出て、調査対象である森に辿り着いた頃には満月が二人を見下ろしていた。二人が跨っている箒は少しふらつきながらも森の入り口の前にゆっくりと降り、魔術師ルークが箒の柄を握る力を弱めると、箒は浮力を失い、ただの箒に戻った。

「……なあルーク。帰りは徒歩にしねえか？ 箒は、速いのは良いけど、やっぱ酔っちまうよ」

箒を無限鞆に片づけ、森に入る準備をしているルークに、護衛のユノは口元を押さえながら話しかけた。しかしルークは首を横に振る。

「申し訳ないが、陛下からは『早急に調査せよ』と仰せつかっている。酔い止めの薬はいくらでも渡すから諦めてくれ……おい、寄りかかると、髪が邪魔だ」

ルークは寄りかかってくるユノの長い髪をそっと払い、鞆から取り出した薬を、瓶の蓋を開けて差し出す。ユノはそれを無言で受け取り、少し顔をしかめた後、一気に喉へ流し込んだ。

「ああクソ、もっと飲みやすくならねえかな、これ」

ユノは口元を手で拭いながら愚痴をこぼすも、薬がすぐに効き、一気に顔色が良くなっていった。

「はあ。文句があるなら自分で買ってこい」

ルークはユノの苦言をバツサリと切り捨てると、足早に森へと歩き始めた。ユノもすぐに小走りで追いかけて、二人は森の奥へと進み始めた。

奥へ進むにつれて、木々の中に『異物』が混ざり始める。この大陸では見ることの無い、砂利や泥が固まったような石でできた瓦礫、『固化泥石』が森に降り注いだようで、木を薙ぎ倒すように鎮座する塊も見受けられた。

「道の先にかいのが転がってやがる、今のうちに回り道でもするか？」

ユノは道を塞ぐように倒れている石柱を発見し、ルークに報告した。ルークはユノの指さす先を、眼鏡を調節しながら凝視したが、それらしきものを見つけられなかった。

「まあ、ユノがそう言うなら迂回しよう。安全そうなのは右に逸れる経路だが……むぐ」

ユノはルークの口に指を当て、聞き耳を立てる。目を閉じ、少しずつ顔の向きを変え、彼女だけが聞こえている音の発生源を探っていた。

「この音、アイツらがもう湧いてやがる。仕留めに行くか？」

ユノはルークが示したのと反対、道の左側の獣道を指す。

「魔物化した異物か。本当は全体の状況を確認してから行きたいが、放っておいて奇襲されても困る。向かおう」
ルークは魔石の付いた手袋を改めて整える。ユノも担いでいた銃と槊杖を手に持ち、火薬と弾を手早く込める。お互いが臨戦態勢になったことを確認すると、二人は同時に獣道を音もなく駆け出した。

少し駆けた先でユノが合図を出し、ルークが魔物の気配を感じる前に止まった。ユノが耳をそばだて、道の先をじっと見始めたので、ルークはなぜ止まったか聞こうとしたのをやめ、周囲の様子を観察しながらユノを待った。

「人……女の子が魔物とやりあってる。助けに行こうぜ」
ユノはルークの肩を掴むが、ルークはピクリとも動かない。逆に、先を急ごうとするユノの手を掴んで制止する。

「待て、普段の戦法では巻き込む可能性がある。策を練りながら向かおう。戦況の把握を頼む」

「まるでオレが考えなしみたいに言うじゃねえか」

ルークは少し考えた後、無言で走り出した。

「あーっ、本当にそう思ってたんな！」

ユノはルークを追いかけながら、その先の戦闘の様子を観察する。

「魔物はその辺の変な石みたいな奴だな。女の子の方は……見たことない武器だ。囲まれてるが、上手く立ち回って……切り伏せた！ 相当な手練れだぞ、あの子」

「そうか、なら一言かければ……ッ」

ルークも戦闘の様子が見えるようになり、おびただし数の魔物が少女に襲い掛かっているのを見て、また足を止めた。

「これだけいるなら、ここから俺が魔法で……ユノ、彼女を呼んでこつちに誘導してくれ」

「火薬系以外は効かないって話じゃ……ああ、アンタのは効くんだったか。……おーい、金髪ちゃん！ こつちだ！」

ユノが大声で呼ぶと少女はこちらに気付き、小さく頷いた。すると彼女はルーク達に向かつて走り出した。しかし慣れていないのか、木の根やぬかるみに足を取られて速度が出ない。魔物が一匹、少女に追いつきそうになつているのを見たユノは、咄嗟に銃を構える。

「頭下げな！」

少女が姿勢を低くしたのと同時にユノは引き金を引く。銃弾は少女の真上を飛び、少女に襲い掛かろうとした魔物に命中する。魔物は断末魔のような音を立てながら砕け、纏わりついていた黒い靄のようなものも霧散していった。

「もう少しだ！ ルーク、準備できたか！？」

「防護魔法をかければ……（シエルダール）。よし、いつでも撃てる」

ルークは被弾を防ぐ光の壁を生成し、もう一度集中を高める。その横で少女は二人の元に辿り着き、息を切らしながら訊ねた。

「あ、あの、一体何を……」

しかし少女を追ってきた魔物たちはすぐそこまで迫っている。

「死にたくなきや後ろにいな。ルーク！」

「レイアールー！」

ルークが呪文を唱えた瞬間、構えていた手の先から光が一直線に伸び、彼の鋭い視線の先にいる全てをその光に溶かした。ほんの数秒でルークが手を閉じると光は消えたが、光の跡を目で辿れば木の幹に穴が開き、地面は抉れ、魔物の一匹も残っていないかった。

「終わったぞ」

「ルーク、光の魔法使うなら先に言ってくれよ……目がチカチカする」

ユノは臉を押さえながらルークに文句を言った。ルークは振り向き、後ろに隠れたはずの少女を探すと、やはり彼女も魔法の光に目が眩んだのか、目を何度も擦っていた。ルークは少女に怪我が無いか見るために近づくと、少女はルークに話しかけてきた。

「お、お二人とも大丈夫ですか……？」

視界がおぼつかないながら、彼女はルークとユノのことを心配していた。

「こちらは無事だ、さっきの一撃で魔物は全て倒した。

そちらはどうだ、怪我はないか」

ルークは会話しつつ少女を観察する。足元は泥で汚れているようだが、怪我はない。見慣れない服装と、暗い森の中でぼんやりと光る、槍のような見た目をした武器。（並の攻撃が効かないはずの異物の魔物を切り伏せたと言うなら、これを再現できれば……）

「……もしもーし」

少女の持つ武器をぼーっと見ていたルークは、突如視界に入ってきた少女と目が合った。視界を取り戻したことでぱちりと見開かれた目の中心には、ガラスのような緑色の大きな瞳があった。

「！ す、すまない、見慣れない武器だったから、見入ってしまった。怪我はなさそうだな」

ルークは驚いて一歩身を引く。

「そうでしたか、じゃあ存分に見て……じゃなくて！ 助けていただし、ありがとうございます。一人では多分勝てなかったの、命拾いました」

少女は深々と頭を下げる。その姿によって少女の小柄さが際立つ。そしてその背にぼん、とユノが手を置く。

「いやーだいぶ前から見てたけどさ、なかなか良い武器さばきだったぜ。助太刀しなくても勝てそうだって」

ユノは少女を褒めたたえる。彼女にもルーク同様、武器を物珍しげに見ていたが、彼女はルークとは違い、こういう時ははずけずけと質問するのだった。

「なあ、その武器、異物の魔物をスパッと切れるなんてすげえな！どこで手に入れたんだ？名前とかあるのか？オレにも扱えるか!？」

「ずんずんと迫るユノに少女は気圧され、「えっと……」と声を漏らす。ルークはユノの胸当ての襟を掴み、少女から引き剥がす。

「うぐっ……ああ、ごめんごめん。熱くなってつい」

ユノは一步下がりがり、ルークと共に少女の返答を待つ。

しかし、少女は少し表情を曇らせてしまった。

「その……思い出せなくて」

少女は武器を握りしめる。

「気が付いたらここに居て、ここがどこなのかも知らずに何日も過ごしていたら、変な石が飛びかかってきて」

（この森の広さを考えると、数日も抜け出せないまま生き延びるのは無理がある。……衣服の縫製、この国の技術で再現できるか未知数な武器……、もしや帝国の密偵か？）

ルークは少女の様相を手帳に書き留める。国王に仕える者のあるべき姿とはこういうもの、ルークはそう思っていたが。

「な、なんてこった……大変だったんだなあ、あんたこんな小さくて細っこくて……。よし、町まで送るつもりだったが、こうなったらオレが面倒見てやるよ！」

「は!?! お前、護衛の仕事はどうするんだ!？」

ルークは驚きのあまり手帳に書き損じの跡を残してしまった。ユノは「うーん」と少し唸った後、名案を思いついたと言わんばかりに目を輝かせた。

「じゃあ一緒に面倒見ようぜ！なあいいだろ？右も左も分かんない女の子を放っておけねえよお」

ユノは表情をコロコロと変えながら、あからさまに顔をしかめたルークの肩を掴んでぐわんぐわんと揺らす。

「そ、れ、に……この子、異物の魔物を切れるんだぜ?」

ルークは額を押さえる。

（くそ。ユノ、なんて言えば俺を揺さぶれるか理解してるな……）

「言い分は分かった。考えさせてくれ」

ルークはユノを押さえて離すと、二人から距離を置き、思考を整理する。

「いよいよ、あそこまで行けば説得成功みたいなもんだ」

ユノは少女の元へ行き、ニコニコしながら話しかける。

「そ、そうなんですわね。でも良いんですか？ありがたしい申し出ですけど、その……彼の言うように、お仕事とかの邪魔になったりは……」

少女はユノを見上げ、そしてルークの背を見る。

「心配してくれんの？ あんがと。でも大丈夫、『仕事の一環』ってことにすりゃいいんだよ」

(勝手なことを言う……でもあの武器は調べる価値がある。怪しいが、帝国の手先だったとしても、逆にこちらが利用すればいいだけの話……よし)

ルークは事の経緯を記録し終わると、二人の元へと戻った。

「お、どうだ？」

「……今は暫定的に『研究対象』として保護する。正式な処遇は、陛下に決めていただく。それで良いだろうか」

ルークは少女に確認を取ると、少女は一瞬キョトンとしたが、すぐに頷いた。

「先立つものが何もないので、付いて行って良いなら、名目は何でも構わないです」

少女の武器を持つ手が、少し震える。ルークが少しずつ視線を上げていくと、少女の瞳は潤んで、ほんの少しの月明かりをきらきらと反射させていた。

目が合うと、少女は目を逸らす。

「あつ、ごめんなさい、ずっと一人で、心細かったもので……」

か細い声だった。ルークがぎこちなく手を差し出そうとしたと同時に、ユノはさっと腕を伸ばし、少女の頭を撫でた。

「そうだろうさ。でも、今からはオレたちが付いてるからな」

少女は瞼を思いっきり閉じ、涙を拭う。

「はい……ありがとうございます」

瞳は潤んだままであったが、少女は柔らかな笑みを浮かべていた。

〈二話へ続く〉